四季株式会社

「今年もミュージカル界は劇団四季（浅利慶太代表）の快進撃が続きそうだ。現在、東京でロングラン中が、通算3000回を超えた「キャッツ」（キャッツ・シアター）、大阪と2都市同時無期限公演と日本初の試みに挑んでいる「美女と野獣」（赤坂ミュージカル劇場）の2本がある。いずれも専用劇場での上演だ。さらに、日生劇場で4月まで「オペラ座の怪人」が上演中であり、今月からはファミリー・ミュージカル「桃次郎の冒険」の全国公演がスタートする。東京地区以外では、オリジナルミュージカル「ユタと不思議な仲間たち」が3月から、札幌市で開幕。大阪では同じ月に、「日曜はダメよ！」が12年ぶりに再演される。5月には福岡市に専用劇場の「福岡シティ劇場」がオープン予定だ。中でも「美女と野獣」は、昨年の開幕前の段階で東西合わせて50万枚を売り上げており、前人気からすごかった。ハイテクを駆使した愛のファンタジーは、ディズニー・ファンの家族層を確実に引き付けている。」（「演劇ガイド＝ミュージカルは劇団四季が快進撃」『毎日新聞』1996. 1. 1.）

日本の演劇

日本の演劇あるいは芸能の起源をたどっていくと、他の地域と同様に太古の原日本人の呪術的な原始芸能に行きあたる。その後、千数百年のあいだに、他のアジア諸民族や西洋各国の芸能や演劇からの大きな影響を受けて、日本演劇は複雑多岐な展開をとげた。日本の演劇には現存するものだけでも、舞楽（雅楽）、能、狂言、文楽（人形浄瑠璃）、歌舞伎などのいわゆる伝統的舞台と、新派、新劇、オペラ、バレー、ミュージカル、商業演劇、人形劇、少女歌劇、前衛演劇などの近代・現代演劇が並存している。この他にも各地の民俗芸能などが残っており、その種類・形態の豊かさは比類がなく、また他国には見られない伝統的特質を今なお継承している。特に様式上の特質として考えられるのは、歌舞(うたまい)性ないし総合芸術性である。古い民間芸能ばかりでなく、人形浄瑠璃や歌舞伎のような発達した演劇にいたるまで、かなり濃厚に歌舞性を持っている。これは西洋のように論理的葛藤そのものに劇的なものを求めるより、感覚的・主情的・肉体的陶酔を求める民族性に密接に

本ケースは、慶應義塾大学大学院経営管理研究科博士課程における特別実習の成果としてまとめられたものであり、経営管理に関する適切あるいは不適切な処理を例示することを意図したものではない。

ケース作成は慶應義塾大学大学院経営管理研究科和田充夫教授の指導のもとに、同研究科博士課程川又啓子が行った。

（1996年4月作成）